

ふるさとの 文化財探訪

～100回を振り返って～

九重町をつくりあげてきた暮らしの積み重ねの風景や文化、すなわち文化財の価値を見つめ直すこと、見出すことに取り組んできた「ふるさとの文化財探訪」コーナー。広報ここのえ2014年4月号から始めた連載が、第100回を超えました。

執筆を続けてこられた九重町文化財調査員と甲斐素純さん（執筆回数最多者）、竹野孝一郎さん（文化財専門員）に話を伺いました。



▲文化財パトロールの一場面

執筆の思い出を教えてください

佐藤三 第44回「佐藤又八」を見たという又八の孫から、「田代善太郎日記大正編」を関東で見つけたことや、祖父と母の記事を見て感動したという便りをいただいたことです。

阿部 自然の愛好家やバードウォッチャーの視点で「イヌワシと草原に関わる人の暮らし」「梅に驚という文化」「九重町のカツコウについての民話」を書かせていただきましたが、文化（文化財）としての鳥というのも意外に考えられるものと、自分の中で新しい視点を発見できたことです。

竹野 古文書や出土品を資料として使って、それを単に解説するのではなく、当時を生きた人々の生活や思いといったものを、どのように伝えたらわかりやすいだろうかとか苦慮することが多かったです。

甲斐 潜石にある「岐部城」が町指定史跡として平成27年5月に指定され、文化財探訪でも3回にわたって紹介させていただいたことです。この城跡が世間に注目された昭和52年当時、私は社会教育指導員として調査・保護・顕彰に関

わりました。踏査により戦国時代の貴重な城跡であることが判明しました。

印象に残っている記事は

佐藤頼 第79回「珪藻土と化石」です。太古のプレートとの地殻変動によって、かつて海や湖だったものが地上へ高く隆起し、山脈を形成する壮大な物語に心がひかれます。

坂本 第53回「ふるさとの妖怪」です。第26回の「平家の百猿伝説」は地域の伝説として扱われたものでしたが、この回の妖怪話は斬新で、より掲載内容の広がりを感じました。

竹野 第78回「茅の輪こぐりで疫病退散」です。コロナという疫病が流行し、その退散を願って「アマビエ」なる妖怪が一躍人気者となりました。茅の輪こぐりも「悪疫退散」を願っての祭りであることから、特に印象に残っています。



▲茅の輪こぐりの様子

甲斐 第55回 「地名について

(1)「地名研究の意義」人々の生活に密着」を連載予定でしたが、私の退任により掲載が1回で終わってしまったことです。

今後、題材にしたい文化財

後藤 大工の「さのさく」作製の浄明寺や小倉神社は文化財に指定されています。同作の宝円寺も価値があると感じています。

種村 九重町の草原です。草原は歴史的に牛馬の農耕利用から現代の畜産業、草原のクヌギを利用した椎茸栽培と、人々の生活生業と密接に関わり、野焼きという人と自然の相互作用で作られ出された

文化財調査員とは・・・

文化財の保存及び活用に関し、意見・調査研究を行うことが主な職務です。

石造物、植物学、考古学、民俗、建築、環境歴史学、鳥類などの専門領域を持つ10人で活動しています。

定数は11人です。自分のテーマで調査研究したい方を募集中です。

【九重町文化財調査員】

内	恵	克	彦
佐	藤	三	千代
佐	藤	頼	久
坂	本	美	樹
後	藤	浩	二
衛	藤	銑	太
種	村	英	大
音	成	葉	子
阿	部	秀	幸
梅	木	恵	美



▲泉水ロード

「文化的景観」という文化財の一つです。九重町の草原は現在、文化財指定はされていないものの、草原の歴史は文献だと1000年、地層の調査からは1万年ともいわれています。

ふるさとの文化財探訪

第101回

九重山系の成り立ち

文化財調査員 佐藤 頼 久

約三百万年前頃、九州はまっぶたつに引き裂かれるような謎の力が働き、真中に巨大な地溝

帯が出来ていたようだ。これは、

由佐悠紀京大名誉教授が、二千ヶ所で重力計測定を計った結果判明した。この地溝帯に沼や湖の湿地帯が形成された。その後、フィリピン海プレートがユーラシアプレートの下に沈み込むことで、放出された水が周辺のマントルに供給される為、岩石が溶けやすく、マグマができやすくなる。

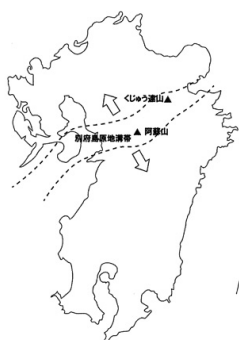
したがって噴火が何度も繰り返され、水がたえず供給されることで、粘性の高い石英安山岩のマグマが形成される。最初万年山系の火山活動が活発化し、約二十万年前頃に九重火山群の活動が、中央構造線に沿って起こった。

そして、阿蘇山は約三十万年前から九万年前までに大規模な噴火を千回繰り返して、千回目の大爆発では北海道東部まで火山灰が10cm以上降った。この時の溶岩流が玖珠地方に到達している。一連の火山活動により、湖沼に溶岩や火山灰推積降し、動植物が化石化した。その結果、野上珪藻

土中から採集される「淡水性ニシン」で「金魚藻類」とともに産する。この湖の堆積層の厚さは、塚脇南方唐杉の550mから内河野320mの間に認められるが、少なくとも300mの厚みはあったものと推察される。

南海トラフ（水深4000m級の深い溝で舟状海盆）による巨大地震も心配されるが、火山活動の恩恵として九湯の温泉地や九州の北海道と言われる飯田高原を地形学的にみると、南に久住山を始め数個の1000m以上の火山を擁し、東に黒嶽、西に涌蓋山地に崩平山と一見カルデラの観がある。そしてラムサール条約登録の坊ガツル湿原といった風光明媚な景色、春のミヤマキリシマや秋の紅葉が見どころである。

このように悠久の歴史の中で、色々な災害もあるが、風景は抜群に良いし、地熱発電は日本一だし、スキー場もあるし住み心地のよい九重町だと思う。



お問い合わせ先 九重町歴史資料館 (九重文化センター内) ☎76-3888